高齢者における終活行動とスピリチュアリティとの関連の検討

○河村 諒¹・中里 和弘²(関西福祉科学大学¹・尚絅大学短期大学部²)

キーワード: 終活, スピリチュアリティ, エンド・オブ・ライフ

Preparation for the end of life and spirituality of elderly people

Ryo Kawamura¹ and Kazuhiro Nakazato²(Kansai university of welfare science¹, Shokei University Junior College²)

Key Words: Preparation for the end of life, spirituality, end of life

目的: 多死社会を迎える我が国では今後、人生の最終段階（エンド・オブ・ライフ）におけるケアの充実が求められる。エンド・オブ・ライフケアとは「病や老いなどにより、人が人生を終える時期に必要なとされるケア」であり（日本緩和医療学会, 2011）、その実践として、生活文化に即した当人・家族の意思決定支援のあり方や仕組みづくりが急務である（長江, 2014）。自分自身のエンド・オブ・ライフ（ケア）の過ごし方や希望、死後の事柄等について事前に考えて準備する行動として終活がある。終活とは周囲に迷惑をかけずに人生の終焉に備えるための準備（岡本他, 2017）であり、高齢者からの関心も高い（林他, 2019; 岡本他, 2017）。また、信仰心がある高齢者ほど終末期を迎える準備をしており、家族に終末期の過ごし方に関する希望を伝えていることも報告されている（荒木他, 2010）。そして信仰心に関しては、宗教の信仰がスピリチュアリティの形成に影響を与えると考えられている（窪寺, 2008）。スピリチュアリティの本質は「人生の意味や死の恐怖、神の存在の探求など、人間存在の根底に関わる人間自身の内面性」（高橋他, 2004）であり、死の意識や悔い、宗教といったスピリチュアルな課題は、高齢者の生活課題を構成する重要な要素といえる（岡本, 2003）。本研究では、高齢者を対象に終活を行っている人と行っていない人で、スピリチュアリティに違いがみられるのかといった関連について検討することを目的とした。これにより、スピリチュアリティの視点を含めた終活行動支援のあり方を理解するための基礎資料となると考える。

方法: 【対象者及び手続】中部圏の浄土真宗の1寺院において、65歳以上の門徒284名を対象に質問紙調査を行い、回答のあった180名（男性81名、女性99名：平均年齢75.3歳、SD=7.5）を分析対象者とした。調査は2018年11月～12月に実施した。【調査内容】1）終活行動：岡本他（2017）を参考に、10項目の終活について、「行う予定はない」「興味はあるが、まだ行っていない」「すでに行っている」の3件法で尋ねた。2）スピリチュアリティ：スピリチュアリティ評定尺度（三澤他, 2010）を用いた。尺度は5因子（「乗り越えた道の確認」「他者とのつながり」「超越的なものへの関心」「自己存在の探求」「未来への心の準備」）16項目からなる。本研究では対象者の負担を考慮し、各因子から因子負荷量が高い順にそれぞれ2項目を抽出した10項目を用い、「1. 全く思わない」～「5. 非常に思う」の5件法で尋ねた。得点が高いほど因子への関心・態度が高いことを示す。

結果: スピリチュアリティ評定尺度の各因子の得点を従属変数、終活行動を独立変数とする分散分析を行った。主な結果として、1）死に臨む前の生の延長線上での終活行動（【これからの人生で体験しておきたいことの整理】【身の回りの物品整理】【大切な人へのメッセージを残しておくこと】）では、「乗り越えた道の確認」「超越的なものへの関心」「自己存在の探求」がすでに行っている人の方が行う予定は

ない人よりも得点が高かった。2）最期をどのように迎えるかの意思決定終活行動（【終末期に希望する医療・介護サービスを決めておくこと】【終末期の病状や余命告知に対する意思表示をしておくこと】【死を迎える場所を決めておくこと】）も、「乗り越えた道の確認」「超越的なものへの関心」「自己存在の探求」がすでに行っている人の方が行う予定はない人よりも得点が高かった。3）死後を見越した終活行動（【遺産相続・整理】【葬儀の内容を決めておくこと】【お墓のことを決めておくこと】）では、「乗り越えた道の確認」がすでに行っている人の方が行う予定はない人よりも得点が高かった。

考察: 終活行動全体の傾向として、すでに行っている人の方が行う予定はない人よりも「乗り越えた道の確認」の得点が高い傾向にあった。「乗り越えた道の確認」は過去の出来事を現在との連続性から理解する姿勢といえる。自分自身の未来に対して、エンド・オブ・ライフやエンド・オブ・ライフケアの希望、死後の事柄といった死を見据えた認識を持つ人の特徴として、死や未来だけでなく過去と現在と統合する思考があると考ええる。高齢者の終活行動を理解する上では、終末期や死を想像することのみに焦点を当てるのではなく、過去と現在の振り返りを通して終末期や死を想像する過程を支える視点が重要と考える。一方で、終活行動の内容によってスピリチュアリティの関連の違いも考えられる。1）死に臨む前の生の延長線上での終活行動では、主に「超越的なものへの関心」「自己存在の探求」との関連が見られた。生の延長線上の終活行動に対する認識を持つ人の特徴として、世代的つながりや大きな流れの中での自身の存在意義を見つめなおす思考があると考ええる。高齢者の終活行動において、超越的な視点を踏まえて、生の延長線上の活動を通しての存在意義や人生の統合の探求を支えることもまた重要と考える。

2）最期をどのように迎えるかの意思決定終活行動でも、主に「自己存在の探求」や「超越的なものへの関心」との関連が示された。最期をどのように迎えるかの意思決定終活行動に対する認識を持つ人の特徴としても、世代的つながりや大きな流れの中での自身の存在意義を見つめなおす思考があると考ええる。どのような最期を迎えるかの意思決定に対して超越的な視点や自身の生や死の意味づけに視点を持つことは、その人がなぜ終末期にその事柄を希望するのかの背景を理解する1つの価値観になるのではないかと考える。3）死後を見越した終活行動に関して、葬儀は友人をはじめ他者との関わりが大きいものであり、お墓は代々つながるものであるとともに自身が生きたことが形として残るものであるといえる。ただし本研究では「超越的なものへの関心」との間に明確な関連は示されなかった。葬儀やお墓に対する位置づけや考えが多様化している現代においては、必ずしも先祖や神仏を意識することが葬儀やお墓の準備と関連するわけではないとも考えられる。